

福島県二地域における長者伝説

―長者伝説の生成と伝承の一考察―

玉水 洋匡

はじめに

福島県郡山市郡山地区と二本松市杉田地区には、それぞれ「虎丸長者」伝説が伝えられている。「虎丸長者」伝説とは、「虎丸長者」と呼ばれる大富豪が、その周辺に住んでいた。源義家が奥州征伐で通りかかり、援助を求めた（宿泊や食糧など）が「虎丸長者」は断った。脅威に感じた源義家は屋敷を焼き払い、滅ぼしてしまった。しかし「虎丸長者」は自分の財産を埋め、いずこかに逃げ去った。屋敷跡周辺には俗謡が伝わっており、周辺の発掘を行うと焼米などが出てくる。現在では「虎丸長者」のいた場所は、郡衛跡と推定されているという内容である。両地区の伝説を比較してみると、単なる同名の伝説というだけではなく、多くの類似点が見られるということがわかってきた。ちなみに両地区は現在別の市に属しているが、江戸時代の大半は同じ二本松藩に属していた。今回は「虎丸長者」伝説に関す

る資料と現地における調査から見えてきた、「虎丸長者」伝説の伝承と権威づけに注目し、考察していきたい。

ある地域に住む長者が、やってきた権力者に滅ぼされてしまう話は珍しくない。またその話に長者の財宝を埋めたという話や、埋蔵金に関する俗謡、出土品として焼米などが出てくるというのも、どの地域でもあるに違いない。そしてそれぞれの土地で、その話は受け継がれていることだろう。「虎丸長者」伝説もまた両地に現在でも伝わり、現地での資料にも記録されている。しかし江戸時代に限ってみてみると、前期における記録はほとんどなく、後期以降に集中しているのである。江戸時代後期に何があったのか。この問いを考察してみたとき、「虎丸長者」伝説が江戸時代後期に利用されたのではないかという仮説が生れた。しかもそこには当該伝説にも登場し、資料の中心ともなっている、二本松藩を治めていた丹羽家や松平定信の関与が伺えるのだ。同時期に行われていた、藩を中心とする行政事業とも関連づけながら、「虎丸長者」伝説が江戸時代後期に、両

地において利用されたことを考察していく。またその後現地において、どのように伝承されてきたのか、地区ごとに考察していきたい。そして他地域における、郡衙跡とされる地区での長者伝説との関連にも触れていきたいと考えている。

一 資料と先行研究

「虎丸長者」について触れられている資料は、一八〇〇年前後から繰り返し取り上げられている。そのほとんどは福島県で作成された資料や、郡山地区や杉田地区を実際に訪れたうえで調べまとめられた資料となっている。例外は『成形図説』である。鹿兒島で作成された資料の中に、項目の一例として取り上げられている。^①

一方、「虎丸長者」に関して考察している文献は、江戸時代において中心となるのは二書である。成田頼直が著した『松藩搜古』は、享和三年（一八〇三）に出された書で、「虎丸長者」伝説にまつわる出土品、石碑について細かく述べている。もう一つが大鐘義鳴による『相生集』である。天保十二年（一八四一）に出されたものだが、二本松藩内の地理・歴史・習俗が詳しく調査されている。さまざまな資料を参照し、自身でも調査・聞き書きをしている。残念な点は引用された資料の何点かは見つかっているが、ほとんどは不明なことである。二本松市の調査でも、資料のほとんどは亡失とされている。

その後は昭和まで研究書はまとめられなかった。昭和に入る

と、福島県郡山市地理教育研究会により、『郷土誌』がまとめられ、さまざまな資料を引用し、虎丸長者が何者か分析された。杉田地区においては、郷土史家の桑原兵次が文献を調べるとともに、自分自身でも昭和八年に聞き書きをし、『古代中世杉田村の文化』を著した。平成になると、岡田峰幸が『史談絵草子』で虎丸長者が何者であるか独自に分析し、安藤智里が『安積歴史入門』で幅広く、入門的に述べている。

ここまで「虎丸長者」伝説の資料や先行研究をまとめてきた。問題点として指摘しておきたいのは、ここに挙げられた研究は地元の研究に偏っているということである。全国的な、或いは他地域の「長者伝説」研究の中に、「虎丸長者」伝説は取り上げられていない。一方、先に紹介した先行研究では、「虎丸長者」伝説について考察しているものの、他の「長者伝説」との比較研究のようなことはされていない。本稿では「虎丸長者」伝説について考察していくが、こうした問題点も解決していきたい。

というのも、「はじめに」でも述べたように、長者が権力者によって滅ばされる話は珍しくない。源義家に滅ばされてしまう長者伝説も、例えば茨城県で確認することができる。勝田市勝倉に住んでいたとされる長者は、奥州征伐の途中立ち寄った義家に豪華な昼食を出してもなしたという。義家はその財力に危機感を感じ、奥州征伐の帰路、屋敷を焼き払い、勝倉の長者を滅ぼしてしまったのだという。^② 茨城県内の長者伝説を分析した外山善八によると、「十指の長者中、七長者が義家奥州攻めの途次滅ばされ

ている」⁽³⁾。また「義家の疑いからでた類型的な」理由により、長者は滅ぼされているとも述べている。⁽⁴⁾一方で安部元雄によると、「先行する研究者の方々が義家の長者殺し伝説に注目されているが、F 討伐はあまり行動要素としては強くないのである」という⁽⁵⁾。したがって、「茨城の八幡太郎は、村や神社仏閣を、天皇の巡幸に近い形態で、巡行し、地名をつけ、国家の災いとなるものを討伐する正義の神であり、「色濃く八幡信仰に支えられて成立していると考えられる」と結論づけている。⁽⁶⁾

長者伝説に俗謡が伴うのも、典型的であるようだ。柳田國男は、「伝説の最後まで残留し得るものは、どこの国でも長者の栄華と没落、ことに金銀財宝を埋蔵しているという類の口碑である」と述べている。⁽⁷⁾また俗謡の具体例を、「文句には少しずつの異同があるが、『朝日さす夕日かがやく樹のもとに黄金千両漆万杯』⁽⁸⁾などが最も普通の形である」としている。これは後節の「虎丸長者」伝説における俗謡ともつながってくるので、後に述べる。

関連があるとすれば、出土品として焼米が出てくるということとも挙げられる。その話とは「白米城の伝説」である。「白米城の伝説」とは、

或山の上の城砦が水攻めにあう。城中では水の乏しいことを隠すために、馬を崖の端に牽き出して白米を以て脚を洗う真似をして見せた。遠くから之を望んだ寄せ手は欺かれて、水攻めは無益と一旦引揚げて還ろうとしたが、たまたま鳥類犬などの挙動によって謀計が暴露し、又は老女が告げ口をした

為に實際が判つて、終に落城して滅びた。⁽⁹⁾

という話である。この「白米城の伝説」が残る、山の上の城址とされるところからは、焼米が出ることもあるという。このことに關して、柳田國男は山の上の城址ばかりでなく、昔の長者屋敷跡だとされるところからも焼米が出ることに触れ、こうした話の残る土地は「格段の注意と敬意とを」人々に払われ、「伝説の特に成長し易い沃土であつたかも知れぬ」と述べている。⁽¹⁰⁾

二 江戸期における「虎丸長者」伝説

江戸期において、「虎丸長者」伝説がまとまった話として載せられているのは、先に紹介した『相生集』だけである。他の資料は断片にすぎない。例えば『相生集』では『東鄙草』の内容を次のように引用している。

同書又いへらく昔此所に朝日長者といふもの住せしが義家公東夷御征伐のため御下向ありし時国人盡く幕下に参したるに此長者ばかり連々したるによりて焼討にし給ふといへり一説には郡山の虎丸長者の別業の地なる故に郡山台ともいふ虎丸郡山にて没落の時一同こも敗北したるともいへり⁽¹¹⁾

ここには現在の話にある、虎丸長者が源義家に滅ぼされるという内容が含まれている。この『東鄙草』は重要な資料だが、先に述べたように亡失であるため、『相生集』で確認するしかない。なぜ『東鄙草』が重要な資料なのか。それはこの資料のみ、江

戸時代前期に著された、「虎丸長者」伝説が載せられている資料だからである。著者の磯村吉徳は万治元年（一六五八）に二本松を訪れ、丹羽二本松藩初代藩主丹羽光重に仕えている。宝永七年（一七一〇）に亡くなるまでに「東鄙草」はまとめられ、郡山地区・杉田地区両地区の「虎丸長者」伝説も紹介されている。

この初代藩主丹羽光重の時代には、郡山地区でも大きな動きがあった。まず寛文三年（一六六三）に、郡山地区に郡山組・大槻組・片平組の代官所が設置された。つまり郡山地区の宿場町としての基礎が、このときに築かれたのである。また寛文八年（一六六八）、郡山にある如寶寺初代住職に有永がなった。この事柄が意味を持つのは、「虎丸長者」伝説と如寶寺は密接につながっているからである。その一例として、次に郡山地区の「虎丸長者」伝説を記す。

昔むかし、虎丸長者と呼ばれる大金持がいました。屋敷には金銀の珠玉をちりばめ、いろは四十八棟の米蔵をもち、鐘堂からは時を知らせる鐘の音が響き、皿沼で食器を洗い、方八丁には別邸を構えるほどの富豪でした。馬頭観音様を守り本尊とした壮大な観音堂を建立するなど長者の富、権力にかなう者はいませんでした。（中略）

虎丸長者の馬頭観音堂は現在、堂前の如宝寺に残されて、正月には七日堂まいるの参拝者で賑わっています。また、この境内の中に、長者が財宝を埋めたともいわれています。⁽¹²⁾

このように、如寶寺は「虎丸長者」の馬頭観音堂を基にし

ているということが、現在でも伝承されている。このことは、「如寶寺縁起」にも記されている。

大同二年（西暦八〇七年）、この地を治めていた虎丸長者がはるばる京に上り、時の帝・平城天皇に拝謁を賜った際、馬頭観音の尊像を郷土住民の守護仏として御下賜されたことにはじまります。長者は守本尊として現在地に観音堂を建立し、現郡山市中町に庵を結び徳望が高かった笹久根上人を招き、莊嚴な開眼供養をあげ、大衆に布施しました。上人は本尊大日如来を奉じて庵堂を観音堂境内に移し、如寶寺⁽¹³⁾と称して、観世音を守護し奉ったと伝えられています。

しかしその後しばらく、「虎丸長者」伝説が資料に載せられることも、郡山地区・杉田地区両地区に対する動きも見られなくなる。二代藩主丹羽長次の時代、元禄二年（一六八九）に井原西鶴が『一目玉鉦』において、杉田は紹介するが、郡山の項は取り上げられておらず、「虎丸長者」伝説にも触れられていない。また同じ年に、『おくのほそ道』の旅で、松尾芭蕉らが郡山を訪れ一泊するが、杉田は通過し、「虎丸長者」伝説に触れることはなかった。『おくのほそ道』で取り上げられた伝説は、郡山地区では「安積沼の大蛇」、二本松地区では「安達が原の鬼婆」だけであった。ここからこの時代に、「虎丸長者」伝説が伝承されていなかった、と結論付けることは短絡的過ぎる。けれども少なくとも、彼らが著作に載せるほど興味をひかれる内容ではなかったか、彼らが耳にすることはなかったということである。

その状況が七代藩主丹羽長貴の時代に変化する。明和八年（一七七二）に、江戸の学者井上金峨が二本松に長貴の招きで呼ばれ、七か月滞在する。滞在中に井上金峨は二本松藩のあちこちを訪ねて歩いている。その様子がまとめられたのが、天明二年（一七八二）に出された、『考槃堂漫録』である。『考槃堂漫録』の中で、杉田地区も紹介され、「虎丸長者」伝説のこと、「虎丸長者」屋敷跡が杉田地区にあり、焼米が発見されていることが書かれている。また寛政六年（一七九四）には、江戸から松島までの途上で、谷文晁が郡山地区・杉田地区の両地区も旅をし、『松島日記』において絵入りで両地の様子を紹介している。その中には、郡山地区の「虎丸長者」屋敷跡の紹介もあり、古瓦が出土していることが書かれている。この時代、郡山地区から西に位置する片平地区では、『万葉集』『大和物語』などに記されてきた、「采女伝説」に関連する葛城主の石碑を建立している。つまりこの時代以降、藩が突然各地区の伝承に注目するようになり、記録させたり整備させたりするようになっていく。

八代藩主丹羽長祥の時代である、寛政十二年（一八〇〇）八月十七日には、白河藩主松平定信が実際に郡山を訪れ、「虎丸長者」屋敷跡まで来て古瓦を拾い、その様子を「郡山の宿過るあたりに川あり、夜討川となんいふ。ここにて虎丸長者の居所の古瓦を得る。この長者てふ人は養老頃のものぞ。其居所のあとに碑あり。養老の文字かすかに残れりとぞ。」と『退閑雜記』¹⁴に書いている。松平定信は同年、白河においては白河の関について検証し、白河

の関の場所を確定させ、古関として石碑を設置させている。また享和年間（一八〇一〜一八〇三）には、杉田地区において金印が発掘される。それらの成果が享和三年（一八〇三）に、成田頼直により『松藩搜古』において紹介された。その凡例を見てみると、「一此書題するに搜古を以てすれば古墟舊跡人口に膾炙する所といえとも文献の徴すべきなきは載せず安達太郎の城墟虎丸長者の故宅の如きは是也」¹⁵とあり、「虎丸長者」伝説は両地区において広く伝わっていたことがうかがい知れる。

九代藩主丹羽長富は、杉田地区の「虎丸長者」伝説に関連する地、長者の宮によく遊びに出かけたという。¹⁶その時代、文化十三年（一八一六）に、如寶寺十代住職長観が観音堂の下より瓦類を発掘したという記録がある。¹⁷天保六年（一八三五）には杉田地区において、同地域を詠んだとされる落合の万葉歌碑を建立した。¹⁸そして天保十二年（一八四一）には、二本松藩士大鐘義鳴が『相生集』をまとめ、「虎丸長者」についても同書で論じられることになる。

最後の十代藩主丹羽長國の時代では、安政六年（一八五九）に如寶寺十一代住職諦観が、長國に瓦類を献上し掛け物を拝領したという記録がある。¹⁹また幕末、杉田地区では長國が発掘を命じ、明治元年（一八六八）瑪瑙曲玉及虎丸と彫刻した印章を発掘し、長國に献上したという。²⁰

以上のことから考えると、明らかに歴代の二本松藩主、白河藩元藩主松平定信も「虎丸長者」伝説を認知していたことが伺える。そればかりでなく、「虎丸長者」伝説を記録するのも、「虎

丸長者」伝説にまつわるものを発掘させるのも、二本松歴代藩主や松平定信自身による命令だったのである。そこには「制令」が関わっている。松平定信は先にも紹介した『退閑雜記』で、

かの谷文晁は田邸より附来りしものなれども、かの邸の太夫に言やりて、温泉にゆあみの事をもて是も同じく行けり。殊に谷氏は好古の癖ありければ、さまざまの石、または名どころの草木の枝葉など探り求めてかへりぬ。古碑なんども摺もてかへりけり。予此両士行とき、制令の事かいてやりぬ。其略に公の御領はさらなり、他の封内等へ行て、いささか他の事をたづぬべからず。もし人より語り出すとも、餘所事にしてきくまじきなり。馬夫などは、其領主の事などいふものなり。相かまへて咄しあふまじきをもて、いたく制しぬ。其外はふるきものうつしなんとすると、しゐて求めなんどはしまじきなりなどいふ事もいくはへぬ。^{①)}

と述べている。ここから分かることは、通行も自由にはできなかった時代。これだけ多くの発掘の事実、出土品の記録、「虎丸長者」伝説の紹介が残されているということ、このことこそが権力者の関与をもの語っているのである。

ではなぜ彼らは両地区、そして「虎丸長者」伝説をこんなにも重要視してきたのだろうか。そこには歴史的価値があったのだろうと考える。古瓦や焼米、印章などが出てくるのは、両地区に何かしらの遺跡があったことがわかる。それは郡衙跡であった。郡山地区には律令制度下で安積郡衙が置かれていた。杉田

地区には安積郡衙から分置された安達郡衙が置かれていた。この両郡衙跡が「虎丸長者」屋敷跡とされたのである。二本松藩領内に、二つの郡衙跡があるという歴史的事実、領民に広く伝わる「虎丸長者」伝説という伝承、古瓦や焼米、印章などの歴史的遺物、これらによって（このことだけではないが）、二本松藩としての権威を高めようとしたのではないかと考える。

三 両地区での現地調査

江戸時代に大きく取り上げられた「虎丸長者」伝説は、それ以降も地元の資料に載せられてきた。昭和時代にも平成に入ってからさまざまな資料集が編まれ、その中に「虎丸長者」伝説も取り上げられてきたのである。では現在、両地区ではどのように伝えられているのか。現地で聞いてみることにした。

まず平成二十六年九月三日に、杉田地区を訪れ調査を行った。杉田地区では、安達地方観光ボランティアガイドの大友秀夫さんに、「虎丸長者」伝説に関連する所を案内していただきながら、「虎丸長者」伝説をお聞きした。今回お会いした大友さんは二本松地区出身であるという。奥さんは杉田地区出身であり地元で教師をなさっており、クラスで「虎丸長者伝説」の聞き書きの課題を出し、資料集としてまとめたという。虎丸長者の屋敷があったとされる場所で、二本松市の調査も行われた、安達郡衙跡とされている「郡山台」。七年間発掘が行われ、終わった後には看板が

立てられた。焼米、須恵器、瀬戸物など、さまざまなものが出土したという。昔には、「濱守之印」という印章も発見されたという。これらの発掘品は、「虎丸長者」伝説の展示とともに二本松市立博物館に展示されている。発掘が終わった後、「郡山台」には新しい人がたくさんやってきて、家がいっぱい建ってしまったのだという。そのため、「虎丸長者」伝説を語れる人は減ってしまったのだという。その他、源義家の軍団が野営したという「借宿」、虎丸長者に富みをもたらした精霊が消えたと言われた場所「隠里」、虎丸長者が鉄の鑄造所をここに作り、渡来人たちに鉄を製造させていたと言われている「唐木神社」など、地名や神社は遺され、「虎丸長者」伝説を知る人はいるものの、「虎丸長者」伝説を「語る」ことができる人は減っているようである。

次に郡山地区を訪れ調査を行った。平成二十七年八月十六日に、郡山市堂前にある如寶寺を訪れ、住職である保森英士院家からお話をお聞きした。如寶寺の縁起をお聞きするとともに、「虎丸長者」伝説で語られる虎丸長者の埋藏金に関する石碑にも案内していただいた。この石碑は長沼信門という人の墓である。墓の側面には、「當境内は虎丸長者の屋敷跡にして黄金千杯朱千杯漆千杯ありと云傳えり信門記之」という文面が彫られている。この墓は当時の鈴木信量住職によって、明治三十年四月に建立されている。なお長沼信門は住職ではないが、如寶寺にいた僧侶の一人で、さまざまな所に行き、経典を学んだという。それを記念する石碑や、石灯籠などが境内のあちこちに存在している。石碑に刻まれた内容は、「虎丸長者」伝説

でも語られることと同じである。ここから少なくとも、明治時代ころにも、「虎丸長者」伝説が伝わっていたことがわかる。またこの内容は、明治時代以降に出てきた、追加事項ではない。先にも紹介した成田頼直が著した『松藩搜古』には、「郡山の故趾には漆千盃朱千盃黄金千両朝日映夕日暉有梨樹下と云る碑ありと云傳へいつれの時にか有けん野飼に放置したる馬蹄の朱に染みて帰りしことありにと里老の話にあれ」とあり、享和三年（一八〇三）にはすでに、「虎丸長者」伝説の一部として、「虎丸長者」の埋藏金を表す俗謡が伝わっていたことがわかる。俗謡を受け、如寶寺では馬頭観音堂建て替えの際に、発掘調査をしたそうだが、埋藏金はず、大きな石に刻まれた一字経が出てきたのだという。

また保森英士院家から、「七日堂まいり」も見えてみるよう勧められ、平成二十八年一月六日・七日に再度郡山市堂前にある如寶寺を訪れた。「七日堂まいり」とは地元のチラシを引用すると、七日堂まいりは、毎年一月六日・七日に行われる如寶寺馬頭観世音の祭礼です。

元々は、物々交換の場、つまり海の幸・山の幸を持ちより交換していた市から様変わりして、現在では、ダルマ・「まさる」・「団子さし」の団子の木など縁起物を売る初市に変化して来ている。「まさる」は昨年に勝るという意味でダルマは七転八起という縁起物。

境内の内外は約十万人の人手で終日賑わい参詣を終えた人々がそれぞれ縁起物などを買い求めています。

この馬頭観世音菩薩は、虎丸長者が大同二年（八〇七年）時の帝 平城天皇より御下賜されたもので、郷土住民の守護佛とされました。

参詣者の諸々の願いを馬が走る如く早く叶えるといわれ五穀豊穡・萬民豊樂、近年では交通安全・合格成就等の参詣者も多く、門前通りが歩行者天国となり今までに増してたくさん⁽²³⁾の人手で賑わっています。

というお祭である。平成二十八年の「七日堂まいり」は一月六日十五時から七日十六時まで行われ、夜通しお参りの人が並び、露店もずっと開かれていた。「七日堂まいり」を調査して考えたことは、この地区の人々にとつていかに大事にされているかということである。深夜になつても、老若男女が祭りに集い、お参りをしている。NHKも民放も、新聞社も取材に訪れレポートをしている。翌日には地方紙二紙とも、社会面に「七日堂まいり」の記事を写真付きで大きく取り上げていた。しかもこの年に限らず、毎年このように記事になっているそうである。つまり「七日堂まいり」という祭礼とともに、「虎丸長者伝説」は伝承されているのである。

四 「虎丸長者」伝説とは

第二節では江戸時代に書かれた資料や、「虎丸長者」伝説と関連すると考えている事項を、年代順に挙げながら、「虎丸長者」伝説と権力者たちとの関係性を見てきた。明らかに江戸時代の

ある時期から「虎丸長者」伝説は記録され始めた。ある時期からと言えるのには、先に述べた、「虎丸長者」伝説の記録に関与してきた、丹羽家の事情がある。丹羽家は二本松土着の大名ではなかった。丹羽家は織田信長の家臣、丹羽長秀を始祖とする家である。その子の長重は江戸時代になると、常陸国古渡藩、常陸国江戸崎藩、陸奥国棚倉藩、陸奥国白河藩と転々と加増移封された。そしてその子の光重の代に、二本松藩に加増移封されたのである。そうしてやってきた丹羽光重が、治める土地である二本松藩全体の地域を知ろうとしたことは、想像に難くない。実際似たような境遇の大名たちが地誌をまとめさせている。近世地誌を研究していた白井哲也は、「地誌へ関心を示したのは、和歌山藩や松江藩など、相伝の所領から全く別の土地へ移封された諸大名だった。彼らが新たな支配領域に関する知識を必須とした」と述べている。⁽²⁴⁾そこで丹羽光重も地誌『東鄙草』をまとめさせたのであろう。その調査の中で「虎丸長者」伝説は記録されたのである。その後も文献に記録させたり、発掘を繰り返したり、援助した寺院に事物を守らせることにより、「虎丸長者」伝説は権威づけされてきた。その背景には、「虎丸長者」伝説が伝わる二つの地域は、「延喜式」で定められた郡衙であったということがある。郡衙跡を有する歴史ある土地。それを語り伝えるために「虎丸長者伝説」があり、それを実証するために度重なる発掘が行われたのであろう。第三節ではいま現在どのように「虎丸長者伝説」が伝えられているかということを見てきた。杉田では『相生集』という資料集

兼研究書が存在し、発掘によって伝説が「裏付け」られ、それを大事に伝承している。二本松市歴史資料館でも展示されていたが、出土品である焼米や瓦、印章とともに伝説を受け継いでいるのである。現地で「虎丸長者」伝説を伝える方々は確かに減っているものの、地名としては残され、現在でも新たに『あだち野のむかし物語』が編まれるなど伝承されている。また少し古いものではあるが、小学生たちが「杉田の人物」の一人として、「虎丸長者」を取り上げ、調べ学習した資料も残されている。²⁶⁾

一方郡山では記録や事物はさほど取り上げられてこなかった。先に紹介した石碑も、東日本震災で倒壊してしまい、気がつかないで通りすぎる人も多い。しかし信仰で守り続けてきた馬頭観音を通して、「虎丸長者」伝説も確かに伝承されている。しかも細々と語り伝えられるのではなく、老若男女が祭礼に集い、テレビや新聞も必ず何社も取り上げ、報道している。「七日堂まわり」という祭礼とともに、「虎丸長者」伝説は伝承されているのである。そして現在では、形としても残そうとしている。「郡山市伝統文化遺産」というものが、郡山市により認定されているのだが、その中に「如寶寺」が含まれている。その看板を見てもみると、このお寺は「虎丸長者が馬頭観音を安置し、お堂を建立したのが始まりです」としっかりと記されている。²⁷⁾

このように伝承の様相は異なるものの、「虎丸長者」屋敷跡が古代の郡衙跡だとすることは共通している。両地区郡衙遺跡には看板が建てられており、「虎丸長者」伝説にも触れられている。また

遺跡の研究報告書を見ても、「虎丸長者」伝説のことには触れられている。根本豊徳と中村真由美は、杉田地区の郡山台遺跡（安達郡衙）について、長者伝説や焼米が出土することを『考槃堂漫録』、『成形図説』などの諸書を用いて記述しており、高松俊雄は、郡山地区の清水台遺跡（安積郡衙）について、「瓦や礎石などが出土したことから長者伝説が生まれ、『虎丸長者』という名で伝承が語り継がれてきた」と述べている。²⁸⁾つまり「虎丸長者」伝説は、「郡衙遺跡と長者伝説の結びつき」を示す証左とも言える。もちろん、一つの例ばかりでは断定的なことは言えないが、他の地域の長者伝説を見ていくうえでの手掛かりとなりそうである。或いはこのことは、すでに自明なことなのかもしれない。しかしながら、この「郡衙遺跡と長者伝説の結びつき」について論じている研究はとても少ない。また第一節で述べたように、全国的な研究の中で、「虎丸長者」伝説や安積郡・安達郡が取り上げられることはない。そういう意味でも本稿が一つの契機になればと考えている。

五 おわりに

郡衙遺跡と長者伝説はかわっている可能性が大にある。それを調べるためにも、また別の地域の長者伝説も調べ、先の仮説を確かめてみたいと考えている。まずは南北に広げ、福島県内の長者伝説あたりから始めてみるつもりである。北では旧信夫郡衙、伊達郡衙が推定され、長者伝説が伝えられている。

南では磐瀬郡衙、白河郡衙が推定されている。これらの地域について調べていきたい。また長者名にされている「虎丸」という名も調べてみたい。『相生集』においても「虎丸」の名は考察され、その中には讃岐国にあったという虎丸城が関係しているのではないかという説や、太宰府にも「虎丸長者」の伝説があるということも述べられている。実際筑紫野市にある武蔵寺には、創建に「虎丸長者」が関わったという伝説がある。こうした他の地域の「虎丸長者」とのつながりも関連して調べていく必要があると考えている。

附記

本論文は、平成二十八年（二〇一六）六月五日に北海道大学で行われた、第四十回日本口承文芸学会での口頭発表を加筆・修正したものである。貴重なご意見をいただき、諸先生方に感謝申し上げます。

註

- (1) 島津重豪編『成形成説』（文化元年 自刊）。巻第五「加禮伊比」の項目の中で、「焼米」も取り上げられ、二本松で焼米が見つかったことが書かれている。
- (2) 鈴木清「勝倉長者山」「茨城の民俗」九（昭和四十五年 茨城民俗学会）。この他にも、第九号には茨城県内のさまざまな長者伝説が報告されている。

- (3) 外山善八「長者伝―虚像と実像をめぐって―」『茨城の民俗』十（昭和四十六年 茨城民俗学会）。第九号の各報告を基にして、茨城県内に伝わる長者伝説について考察している。源義家に滅ばされた長者以外も取り上げている。この論文では長者伝説の背景には古代に設けられた駅制があるとしている。

- (4) (3) と同書。

- (5) 安部元雄「旅に出た八幡太郎―茨城の義家伝説―」（昭和五十三年 崑書房）。この中では、茨城県内における源義家伝説を分析するために、要素をAからJまで細分化している。訪ねた相手を滅ぼす要素があるものは、「F 討伐」に分類されている。

- (6) (5) と同書。

- (7) 柳田國男「朝日夕日」民俗学研究所編『民俗学辞典』（昭和二十六年 東京堂出版）。引用にあたっては、旧かな遣いおよび旧字体を、現代かな遣いおよび新字体に改めた。

- (8) (7) と同書。

- (9) 柳田國男『傳説』（昭和十五年 岩波書店）。

- (10) 柳田國男『木思石語』（昭和二十三年 實業之日本社）。

- (11) 大鐘義鳴著『相生集』（天保十二年 自刊）。

- (12) 郡山市の中心部を通っているさくら通りに設置されている、案内板の「虎丸長者」伝説を文字に起こしたものである。
- (13) 如寶寺住職である保森英士院長からいただいた、資料に記載されていたものを引用した。

(14) 松平定信著『退閑雜記』(寛政十二年 自刊)。なお引用

に当たっては、『続日本随筆大成』第六卷所収のものを参考にした。森銑三他編『続日本随筆大成』第六卷(昭和五十五年 吉川弘文館)。

(15) 成田頼直著『松藩搜古』(享和三年 自刊)。

(16) 二本松市教育委員会編『ふるさとの伝え語り―二本松市史料叢書』(昭和五十一年 自刊)。

(17) 福島県郡山市地理教育研究会編『郷土誌』(昭和七年 自刊)。

(18) 天保六年(一八三五)七月二十一日に、杉田地区の住民によって建立された。万葉集第十四「東歌」の最後の一首、「安太多良の嶺に伏す鹿猪のありつつも吾は到らむ寝処な去りそね」が、万葉仮名で刻まれている。碑文の下には、「東ハ三春四リ 西ハ安達太良山三リ 南ハ本宮一リ半 北ハ二本松 廿八丁」と刻まれ、道標を兼ねている。この石碑は平成元年に二本松市指定史跡となっている。

(19) (17)と同書。

(20) 安達郡役所編『安達郡案内』(明治四十四年 自刊)。

(21) (14)と同書。

(22) (15)と同書。

(23) 平成二十八年の「七日堂まいり」において、如寶寺周辺で配られていたチラシの中に、「七日堂まいり」の「いわれ」が書かれていた。その「いわれ」をそのまま引用した。

(24) 白井哲哉『日本近世地誌編纂史研究』(平成十六年 思文

閣出版)。

(25) 如寶寺は二本松藩登城免十箇寺などに含まれていない。しかしながら、如寶寺境内に掲げられている、如寶寺および馬頭観世音の提灯すべてに、丹羽家の家紋である「直違紋」がつけられている。如寶寺住職が江戸時代、藩主に面会していることも併せると、如寶寺に対する「支援」があったと考えられる。

(26) 二本松市立杉田小学校編『杉田を中心とした郷土の年表』(昭和六十三年 稿)。

(27) 看板を確認したのは、平成二十七年八月十六日。文化庁の「地域伝統文化総合活性化委託事業」を受け、実施された。全部で七か所指定されており、如寶寺以外では、「安積国造神社」や「芭蕉通り」などが「郡山市伝統文化遺産」となっている。

(28) 条里制・古代都市研究会編『日本古代の郡衙遺跡』(平成二十一年 雄山閣)。

引用・参考文献

- 井原西鶴『二目玉銚』(元禄二年 自刊)
井上金峨『考槃堂漫録』(天明二年 自刊)
谷文晁『松島日記』(寛政八年 自刊)
松平定信『退閑雜記』(寛政十二年 自刊)
松平定信編『集古十種』(寛政十二年 自刊)
成田頼直『松藩搜古』(享和三年 自刊)

島津重豪編『成形成説』(文化元年 自刊)

大鐘義鳴『相生集』(天保十二年 自刊)

安達郡役所編『安達郡案内』(明治四十四年 自刊)

近藤喜一『信達民譚集』(昭和三年 郷土研究社)

福島県郡山市地理教育研究会編『郷土誌』(昭和七年 自刊)

柳田國男『傳説』(昭和十五年 岩波書店)

柳田國男『木思石語』(昭和二十三年 實業之日本社)

柳田國男『日本伝説名彙』(昭和二十五年 日本放送出版協会)

柳田國男『朝日夕日』民俗学研究所編『民俗学辞典』(昭和

二十六年 東京堂出版)

及川儀右衛門編『みちのくの長者たち』(昭和三十二年 未来社)

桑原兵次『古代中世杉田村の文化』(昭和三十四年 自刊)

福島県編『福島県史』第二十四卷(昭和四十二年 自刊)

郡山市編『郡山市史』第七卷 民俗(昭和四十四年 自刊)

鈴木清『勝倉長者山』『茨城の民俗』九(昭和四十五年 茨城民

俗学会)

外山善八『長者伝―虚像と実像をめぐって―』『茨城の民俗』

十(昭和四十六年 茨城民俗学会)

豊田武『英雄と伝説』(昭和五十一年 塙書房)

二本松市教育委員会編『ふるさとのおんえ語り―二本松市史資料

叢書』(昭和五十一年 自刊)

藤田稔『常陸の伝説』(昭和五十一年 第一法規)

大友宣子編『杉田の伝説』(昭和五十一年 稿)

安部元雄『旅に出た八幡太郎―茨城の義家伝説―』(昭和

五十三年 崙書房)

石川純一郎他著『福島県の伝説』(昭和五十五年 角川書店)

福島県国語教育研究会編『福島県の伝説』(昭和五十五年 日本標準)

森銃三他編『続日本随筆大成』第六卷(昭和五十五年 吉川弘

文館)

野村純一編『日本伝説大系』第三卷(昭和五十七年 みずうみ

書房)

郡山市教育委員会編『郡山の伝説』(昭和六十一年 自刊)

二本松市編『二本松市史』第八卷 民俗(昭和六十一年 自刊)

二本松市立杉田小学校編『杉田を中心とした郷土の年表』(昭和

六十三年 稿)

渡辺武久編『二本松の伝説とむかしばなし』(平成六年 歴史春

秋社)

斎藤龍雄他編『あだち野のむかし物語』(平成十三年 安達地方

新しい旅実行委員会)

白井哲哉『日本近世地誌編纂史研究』(平成十六年 思文閣出版)

岡田峰幸『史談絵草子』(平成十七年 自刊)

井本農一他校訂・訳『おくのほそ道 芭蕉・蕪村・一茶名句集』

(平成二十年 小学館)

条里制・古代都市研究会編『日本古代の郡衙遺跡』(平成二十一

年 雄山閣)

安藤智里『安積歴史入門』(平成二十六年 歴史春秋社)

(たまみず・ひろただ／学習院中等科)